世界遺産地区における次世代に向けた建物の活用に関する計画
- 白川郷荻町を対象として -

指導教員　加茂紀和子　教授　　河野裕翔

1. 研究の背景と目的　岐阜県白川村荻町は、江戸時代から昭和初期にかけてつくられた合掌造り家屋の集落と自然の織りなす風景、住民の相互扶助による集落維持の仕組みによってつくられる世界遺産である。1971 年からは「売らない・貸さない・壊さない」の三原則[1]を設け、集落内の建物の管理を村民のみで担い、安易に外部からの介入を受けないことによって景観維持のための文化継承を行ってきた（図 1）。しかし、人口減少の進行（図 2）により村民のみでの景観・文化継承は難しくなってきていることから、村は三原則のうち「貸さない」の緩和を行い、村外移住者の受け入れを検討している。その一方で、これまで守られてきた秩序が崩れる懸念を否めない。本研究は「貸さない」の緩和によって村外移住者の受け入れを行うにあたり、移住体制の整備に加え、村の文化を正しく伝えていくための建物の活用の方法並びに、そのモデルケースとして設計提案を行うことを目的とする。

2. 研究概要　合掌造り家屋は一般的には家族経営の小店舗か民宿、博物館施設として活用されているが、村が所有し、学生に向けた貸し出し施設として指定管理法人が運営を行う事例もみられる。本研究では貸し出し施設旧花植家での 2025 年における滞在体験の可視化、移住者へのヒアリング調査を通じて移住の現状を明らかにする。また、文献調査より建物の活用に変容がみられる事例[2]に着目し、調査を行うことで建物活用の現況を把握した上、移住者に向けた今後の建物活用計画の立案を行う。

3. 旧花植家の活用実態調査　旧花植家の管理を行う一般社団法人ホワイエへのヒアリング調査を行い、運営スキームを作成した（図 3）。これまでの 10 年間で述べ 5 大学との年間契約が行われており、契約料と利用料によって建物の維持管理費と滞在の必要経費が賄われている。

4. 地域行事・人足等の実態調査　荻町では金銭を伴わない地域への奉仕活動である行事・人足等[3]が行われており、移住者にはその理解と率先した参加が求められる。村民と移住者の関わりの場でもある行事・人足等について把握するため、2025 年 6 月 25 日から 12 月 22 日にかけて計 31 日間の滞在を行い、可能な限り地域行事・人足等への参加を行った。その中で内容を把握するとともに、行事の全容の把握とマッピングによる可視化を行った（図 4）。

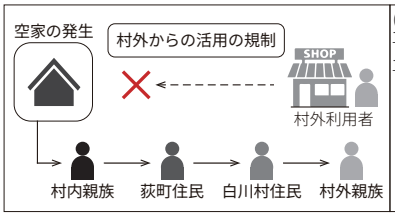

図 1　取り決めによる村外からの活用の規制

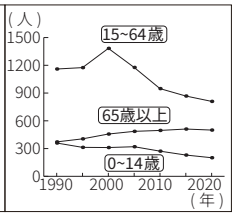

図 2　白川村の人口推移

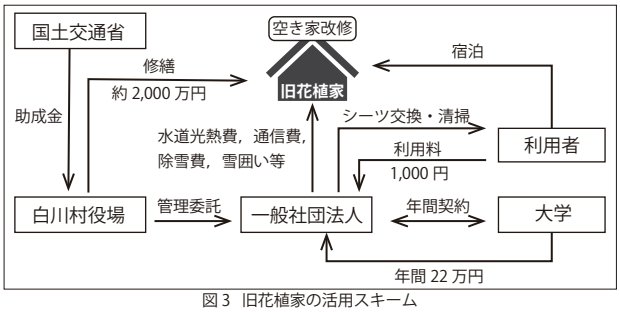

図 3　旧花植家の活用スキーム

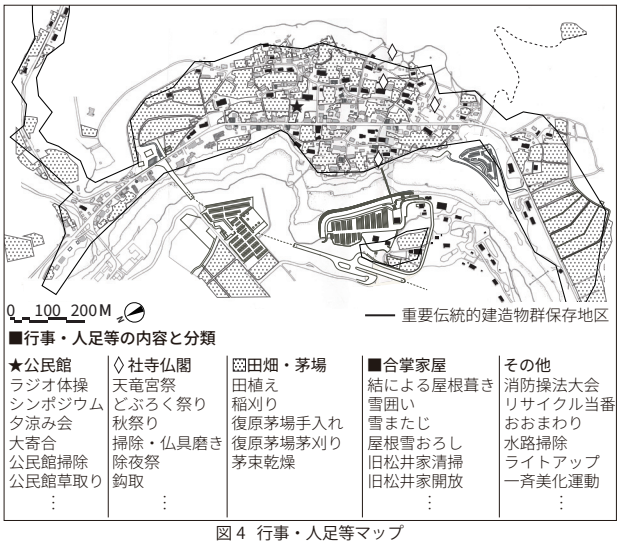

図 4　行事・人足等マップ

表 1　移住者ヒアリング調査のまとめ

ヒアリング対象者の属性							
	事例 1	事例 2	事例 3	事例 4	事例 5	事例 6	事例 7
移住の理由	紹介	嫁入り	嫁入り	嫁入り	婿入り	U ターン	Uターン
来村年数	半年	4 年	17 年	10 年	半年	2 年	4 年
性別	男性	女性	女性	女性	男性	女性	女性
同居人数	3 人	4 人	7 人	5 人	通 い	通 い	3 人

調査結果まとめ	
移住前後の村との関わり	**どのように暮らしに馴染んでいったか**
空き家発生時に声がかかり、移住を行う	人足等での村民との関わりが基本となる
移住するまで生活について知る術がない	転居や田舎暮らしに慣れのあった
移住後に説明機会が設けられる	積極的に出歩き、交流を行った
U ターン・嫁婿は事前に話を聞いていた	子供をきっかけとする人付き合い
経営上の思い	**村に対する思い**
経営や製造のノウハウを生かしている	建物の劣化を防ぐために活用している
村内のほかの店にないものを考えた	村民の居場所を提供している
村への配慮を前提とした上で経営戦略として新しい取り組みを行っている	ごみを出さないようにしている
	村民の思いに影響を受けている
建物の活用状況	**今後の建物の活用について**
間取りが希望に即していない	人手不足のため、新たな住まいが必要
部屋が狭く、足りていない	村民のための住居も不足している
二世帯で生活しており、移動したい	移住の認知を広められるとよい
高齢化により、2 階が使われていない	空き家を手放したくない人もいる

A Plan for the Adaptive Use of Buildings for Future Generations in a World Heritage Area:
A Case Study of Ogimachi Shirakawago　　Yuto Kono

5．移住者ヒアリング調査　現在荻町には嫁入り、婿入り等の理由によって村外から移住を行った人びとが複数存在する。そのうち店舗運営によって主体的に建物の活用を行っている７名を対象に、ヒアリング調査を実施した。移住後の生活においては行事や人足を通じて村民との交流が生まれており、村民の理解を得ての積極的な建物活用がみられた。一方、移住するまで村の暮らしについて知る手だてがないことや、住居の数が不足しており、複数世帯で生活する場合が多いことを明らかにした（表 1）。

6．建物活用の現況調査

荻町の建物の内部空間においては合掌造り家屋の構造部を除いて保存基準の制約がなく、生活の都合や観光地化の過程で変容が生じている。その影響が顕著に現れるとともに、移住の入口としても機能する店舗建築５１事例の現状を整理し、建物活用の現況を把握した（図 5）。

6-1．材料分析　店舗建築の外壁・内壁・床・天井・外構に用いられる材料の定量的な把握を行った。合掌店舗[4]では内外装において伝統的な材料が多くみられた一方、非合掌店舗においては内装において新材料の使用が多くみられた（図 6）。また、外構においては除雪の観点から合掌・非合掌店舗ともに土間コンクリートの使用が多くみられた。

6-2．雪囲い分析　雪囲いの設置状況と性能の把握を行い、冬季における景観・室内環境の変化を把握した。伝統的なオダレが最も景観に調和しており、合掌店舗への設置がみられた（図 7）。採光の確保、設置コストの観点から、建物の裏側や非合掌店舗においてトタン、ビニールシート等の設置がみられた。

6-3．要素抽出　店舗空間のうち空間を特徴づける構成要素の抽出（図 8）を行い、これからの建物の活用を提案する上での手がかりとする。

7．合掌造り店舗調査

合掌店舗のうち、文献調査により復元図の確認ができた 5 事例について、1984 年平図面、2025 年平面図とともにデータシート化し、用途・増築・変更箇所について比較分析を行った。

7-1．改修パターン分析　間取りをそのままに新しい機能を当てはめた「間取り継承型」、新しい機能に合わせて改修を加えた「間取り変更型」、新しい機能を増築部分に設けた「増築型」、増築部分のみで新しい機能が完結する「増築改修型」の４つの改修パターンが得られた（図 9）。

7-2．改修操作分析　1984 年図面から 2025 年図面にかけての変更箇所を外壁・内壁・床・家具・設備・増築レベルで抽出し、改修操作を明らかにした（図１0）。これら改修操作を、村民の間で合意の得られるものと定義し、設計提案に用いる。

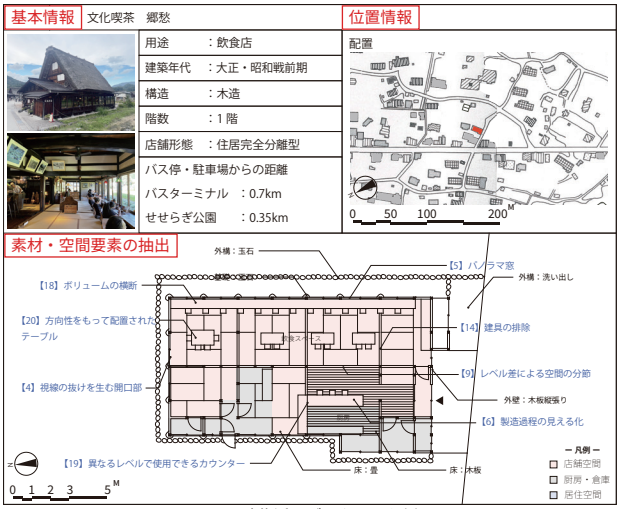

図 5　建物活用データシート例

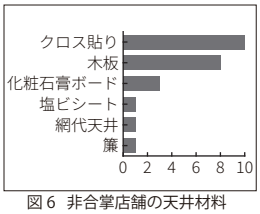

図 6　非合掌店舗の天井材料

	合掌店舗	非合掌店舗	合計
オダレ	7	0	7
木板	2	0	2
トタン	3	0	3
プラスチックタン	1	2	3
養生シート	0	1	1
ビニールシート	1	0	1
屋根付き雪囲い	3	0	3
雪囲いなし	12	29	41

図 7　雪囲いの設置状況（2025 年 12 月 20 日）

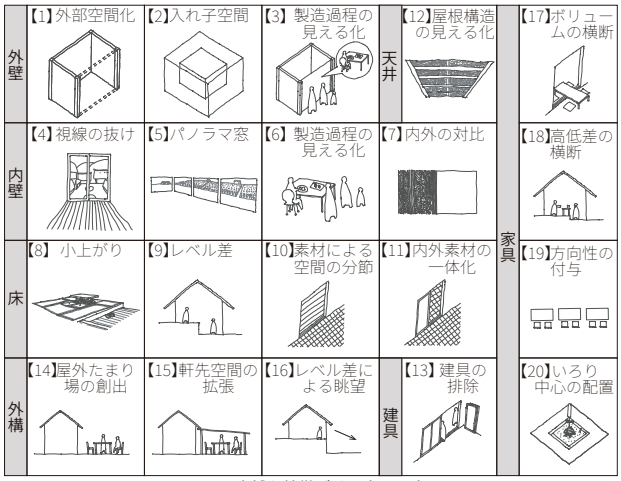

図 8　店舗を特徴づける空間要素

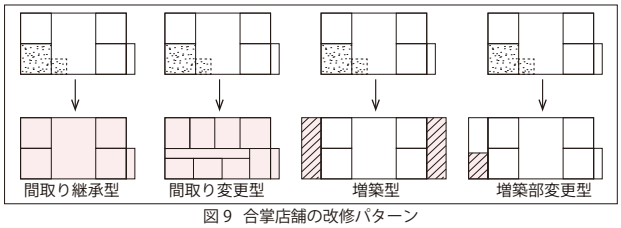

図 9　合掌店舗の改修パターン

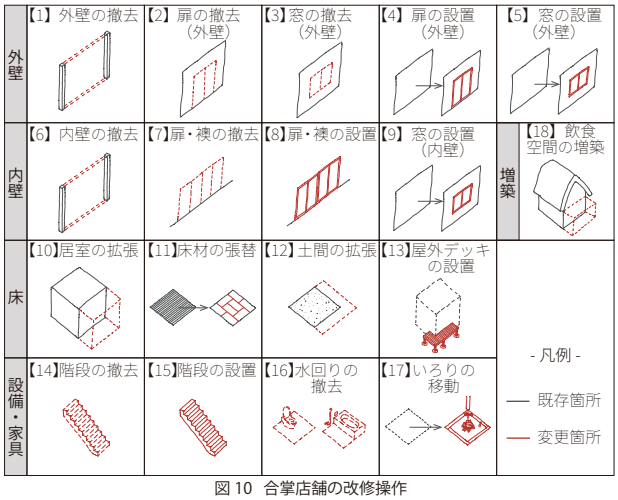

図 10　合掌店舗の改修操作

8. 荻町移住計画　移住者によって村の生活基盤の維持および文化継承を図るためには、移住者同士が情報を共有できる場を設けるとともに、村民との交流の機会を増やすことが重要であると考える。そこで本研究では、村の既存建物の改修を通じて移住者の生活拠点の計画を行う（図 11)。村の生活基盤の核である公民館を、村民・移住者・観光客が利用する新たなコミュニティの場として再構築する project.A と、合掌造り家屋に複数世帯の移住に対応した空間を組み込み、段階的な移住の中で情報を共有する場となる project.B を提案する。

project.A：公民館改修計画　現在の村の公民館は、行事・人足等の拠点として重要な役割を果たしている[5)]。しかし、日常的な開放は行われておらず、景観を支える村の仕組みや生活風景が外からやってくる人びとに十分に伝わっていない。また、RC 造 2 階建てである建物は景観上の課題を有している。そこで､建物のボリュームを抑える意匠を施しながら、村民・移住者・観光客三者の日常的な利用を促す公共空間を設け、利用者間の関係性を再構築することで、これまで見ることのできなかった村民での暮らしを可視化する (図 12)。非重要伝統的建造物であるため、建物裏手にあたり、村民が日常的に利用している広場側のみ、景観保存基準から外れる建築操作を加えた。出入口を広場側に移設し、リビングのような学習室・集会室を土間を用いて広場と一体的に設けることで三者それぞれの利用を促した。観光道である国道側は茅束による雪囲いを常設で設け、一層を隠すことで RC 躯体のボリュームを抑えた。

project.B：合掌造りシェアハウス　合掌造り家屋は管理・環境・設備において様々な課題があり、村には現在、活用の進んでいない合掌造り家屋が 4 棟存在する。その活用のプロトタイプとして、旧花植家を対象に設計を行う。移住者を増やすことを目的に、長期滞在を可能としながら複数世帯で場を共有するシェアハウスを計画した (図 13)。重要伝統的建造物であることから、景観保存基準に準じ、建物の外観・構造を保持しながら住居を入れ子状に挿入することで可逆性のある生活環境の整備を行った。また、通常合掌造り家屋では物置とされるアマ空間[6)]まで入れ子住居を貫入することで、入居可能人数を増やすとともに、居室への採光･通風を確保した。また、住民の所有物を共用部に配置する計画とすることで、住まい手の個性が伝わる計画とした。住居同士の間には生活のための共用機能を配し、既存空間の中で主な時間を過ごすことで、住民同士で村の知識を共有できる場を目指した。また、共用部に面する開口部において雪囲いの設計を行い、冬季においても村の景観を楽しめる計画とした。

9. 結論と展望　本研究では、白川郷荻町における移住の現状に着目し、今後の生活基盤の維持および文化継承を図るための空間再生計画を提示した。村内外の人びとが日常的に時間を共有する新たな地域間交流の場と、移住者同士で知識を深め合うことのできる住まいのモデルケースを示した。移住者が村の暮らしや文化への理解を深め、既存の体制に適切に加わることによって、人口減少に対する一つの対抗手段となることが期待される。

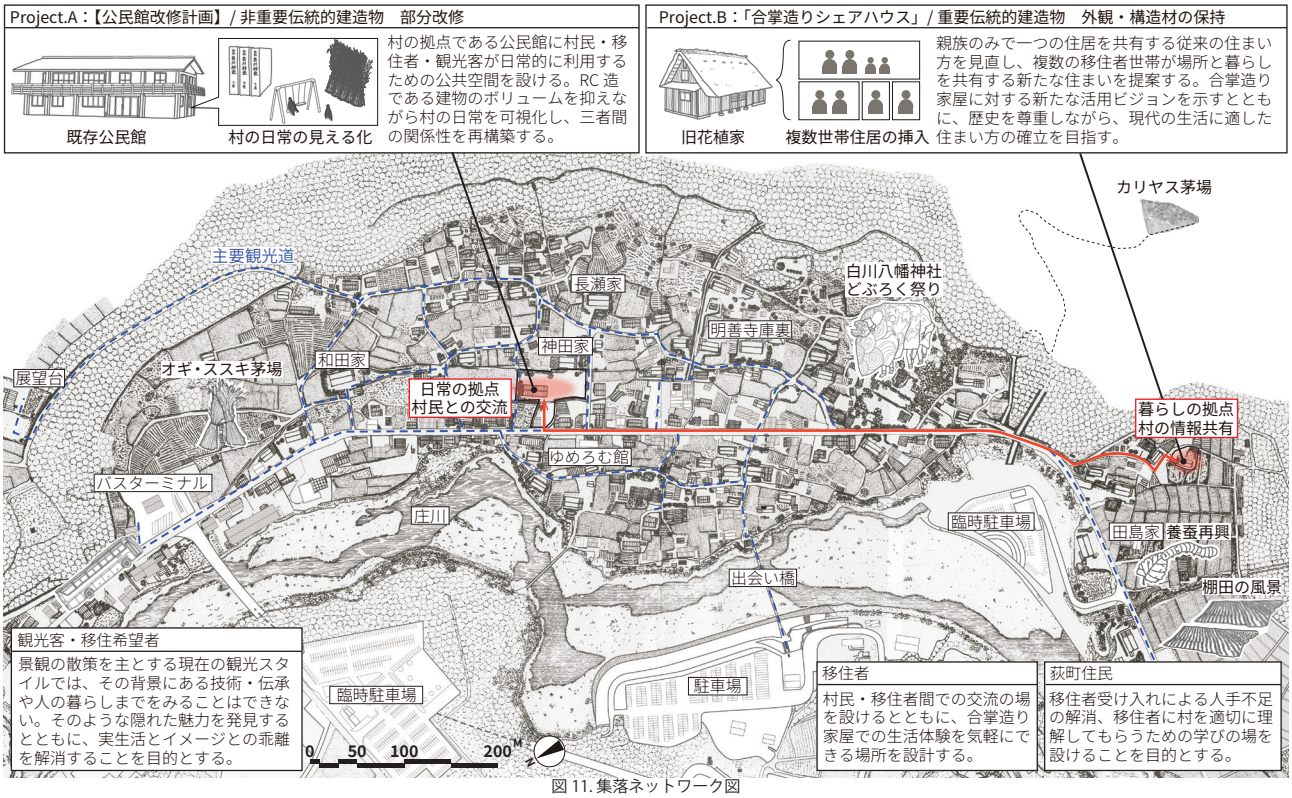

図 11. 集落ネットワーク図

Project.A 村の日常を見える化「公民館改修計画」

地域の拠点である公民館の機能を保持しながら、村民・移住者・観光客が日常利用を行う生活拠点へと改修する。

既存公民館 ▶ 既存機能＋図書室＋自習スペース
部分改修 /〈村民〉〈観光客〉〈移住希望者〉

施設構成

観光道からの視線

駐車場

広場

遊具

0 1 3 5 10 (m)

改修前平面図 S=1:600

調理室 集会室 会議室 広間 玄関

改修後平面図 S=1:600

集会室 学習室 調理室 会議室 A A' B B'

公共空間
かまくら状空間に既存機能と学習室を設ける。土間を介して広場と繋がり、床から小上がり入と、段差で空間を仕切りながら視点場へ誘導する。

常設雪囲い
冬季にしかみられない雪囲いを常設展示し、1Fを覆うことで建物の大きさを抑える。

改修部内観

かまくら状の壁が広場と繋がり、田園風景を切り取る。

A-A' 断面図 S=1:400

平常時は広場の様子を冬季には積雪を観察することができる

雪囲いの常設展示

学習室

0 1 3 5 10 (m)

B-B' 断面図 S=1:400

ベランダのラインで 1F ボリュームを削り、かまくら状の公共空間を挿入することで内外を繋ぐ

田園風景 集会室 学習室 広場

0 1 3 5 10 (m)

図 12 Project.A 建築計画

Project.B 移住者の交流を促す「合掌造りシェアハウス」

移住者を増やすため、既存構造を保持しながら居住空間を挿入し、複数世帯で合掌を共有するシェアハウスを計画する。

重要伝統的建造物 ▶ シェアハウス
外観・構造の保持 /〈村外移住者〉〈Uターン移住者〉

施設構成

茅葺き屋根

ウスバリ

観光道

棚田

改修前平面図＋復原機能 S=1:400

ミンジャ・ウスナワ ダイドコロ・オエ チョウダ ウマヤ デイ

改修後平面図 S=1:400

A A' B B'

住居上層
アマ空間から住居への採光・通風を確保する。住居から上を見上げると屋根構造がみえる。

共用空間
住居の間の既存空間を共用部とし、生活の主な時間を過ごすための機能を設ける。

住居下層
住民のプライバシーを確保する。上層での就寝空間の下にある空間を削り、共用空間に割り当てる。

仮設縁側
雪囲いの設置に合わせて住民が組み立てる。床下に収納できる木組と、玉石を用いた蛇篭で構成。

中廊下

構造の隙間に光が落ちる

雪囲い時外観

冬季においても暮らしが垣間見える

アマ空間

屋根裏を見上げながら眠りにつく住居上層部

A-A' 断面図 S=1:300

通りすがりの観光客から合掌家屋での生活の様子がみえる

天窓の開閉により居室へ外気を取り込む

ダイニング

棚田の風景

0 1 3 5 10 (m)

B-B' 断面図 S=1:300

居室のロフト下部を公共空間として利用

アマ

ダイニング

通常未活用のアマ空間を、採光・通風の場として利用

0 1 3 5 10 (m)

図 13 Project.B 建築計画

【注釈及び参考】1) 建物の変更に関しては、三原則をもとに村民間の話し合いによって判断を行う。2) 白川村役場 , 白川村教育委員会「白川村の合掌造集落」に記載の配置図と現在の配置図を比較し、変更のある建物を把握した。/ 3) 全ての村民は村にある 7 つの組のいずれかに所属し、組ごとに様々な役割を分担して行う。人足は、組での仕事をいう。/ 4) 合掌造りの店舗を合掌店舗、その他店舗を非合掌店舗と定義した。/ 5) 一般社団法人ホワイエよりいただいた行事・人足等の日程により把握。/ 6) かつて養蚕を行っていた屋根裏空間。